海外異聞 五

第 號
海外異聞 五
冊數 共五冊
著者
出所

ル 9
3054
5

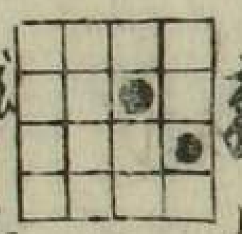
海外異聞巻之五

遊戯

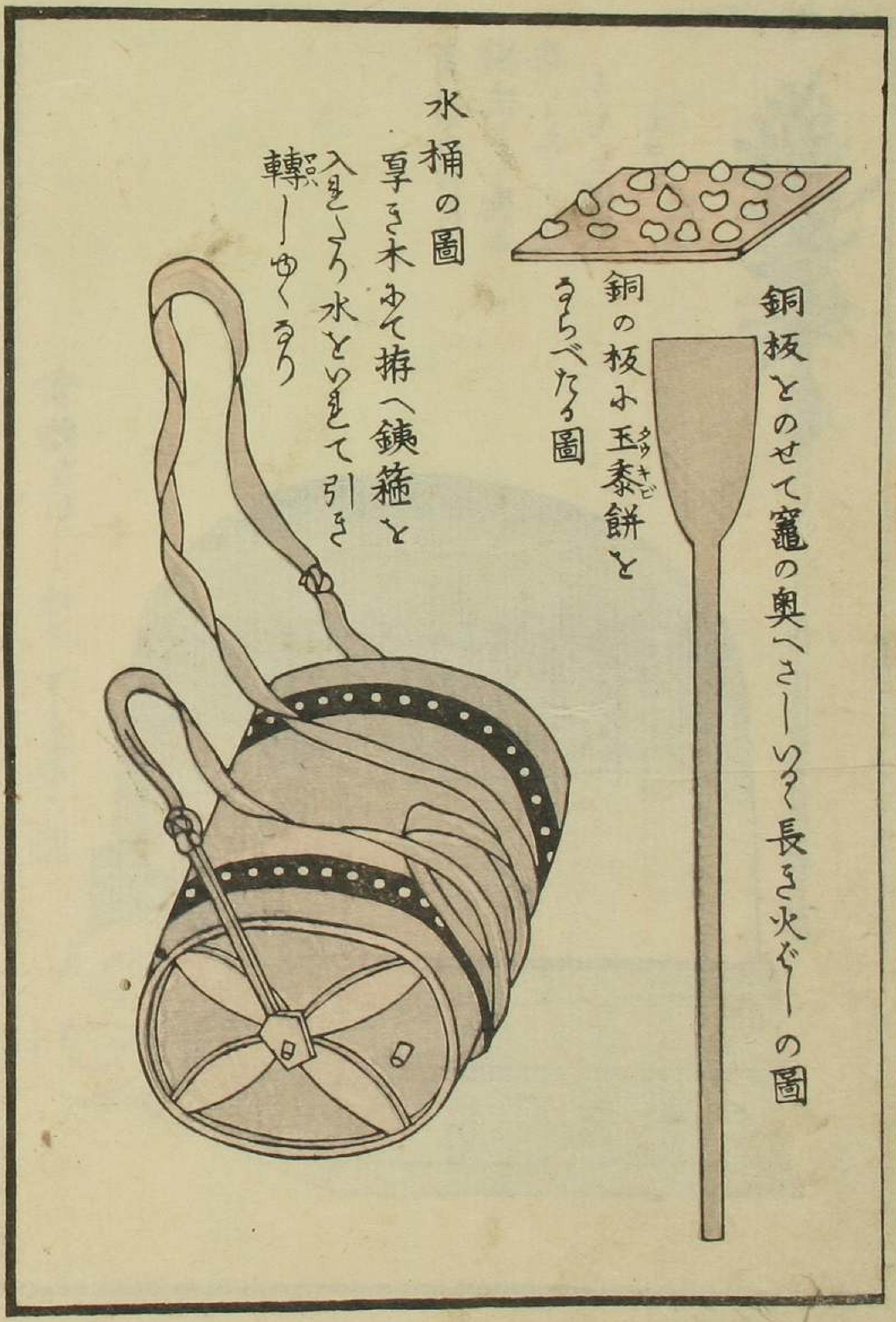
謳音曲なども有て墨是可の都にてもコメリヤ
とひて芝居も常にいつとの楽器を笛太鼓
并に三味線と琴に似るものあり笛を縦笛横
笛あくあり太鼓も大小あり形ち大抵日本に同し
志め志鼓をなし三味線に似るもの胴の裏表
とも薄き板を張り糸ハ四筋あり小さき撥にて
ひく琴ハ桐なる物にて三尺作りの箱タカヤサンなど
て棲くも中に機関あり幕に一服催さ不ある甚

定價五錢

所に象棋の板幅を寸あまり六分ふかくしてえりて並べ
横文字と書付たる駒の譜率と号しこれを名く
臺にのせ是を見るに十本の指にて象棋の駒を
何方にても押せば其の中に置くの音ありて
面白く案するなり
象戯の飛なるものあり局子ともに本にて作る一
方の子を黒く一方は赤し局を四方册して八道
ありて子は丸し行くれは一面づゝ鉢に切かり互ひに
子を打くりて行さきの時は駒子を付て敵の子を飛
越して取る敵の子を二ツ三ツ連りて

一度に飛越て二ツ三ツも取事も食ありて段々すゝみ
行く事互に行しいりは許さず進む事揃ひて
向の端の道に入れば食たる敵の子は象子乃
二手かへる足を踏みる跡す陞たる子は都行とも
許さる行のごとくして敵の子を取つくしたるを勝とす
行方なり敵の子と

跡のごとく来たる時は亦の
子左より右へ飛越を付ひて飛越て二ツ丸取べし
角牌の戯遊ありバラハとて
バラハツヨガルといふ牌の数を四十枚にかぎり紙にて作り
古く深く金の作絵あり押紙は花と人物とを画く

仕方ハ大抵日本の哥がるたのごとく揃へば
合く有るたり牌に老錢の印あり四人メサのごとく
四角より圍てゐる面々輸贏を決る時ハ各對
坐しゐる老れたる牌と相合して数く四人二組ゟ
分て勝負とするなり牌をまぜ合せ日本の如く
配りてハ切ん揃ふして勝くにさしさをまぜ合く
踢毬の戯あり木にて丸き其の径二寸斗なる紙くゝ
両人互に是を蹴る的を定め置て蹴當る者を勝と
するなり
初春帰還節中に日本人と唐人と相撲取しぬすも



あの人は甚大兵なる故組合ては力とかくるに勝れて
押倒されれた離れ易く末まで日本に相撲の手を
出せば心安く勝ちとなりあの人は是を悟らざる故日本
人も人を欺きて倒をしば大形にて重寶がりしとぞ
怒ずしとぞ

貨財

加利弗児亜の辺も金多くして銀は多し馬に
て運び来る銀の濮山のごとく積める所あり銀銭
は形丸くして厚さ一分計りいろいろの模様あり
定は大概一枚かけ目七匁二分ばかり紙に様十六

枚よりて日本の小判と一朱との如し中銭之種有
大銭はベセタといひ小銭をメリウといふ中銭ハ
銭二枚して替るものをウンリヤアリといふ日本の二朱の
ごとし四枚にて替る物をトウリヤアリスといふ日本の
一歩のごとし八枚に替る物をクワトロリヤアリスといふ
日本の二分金の如しと十六枚をラレイシリヤアリスといふ
是は替る銭をなし銅銭あり径およそ七分ばかり完を
文字なし此銭四文を以て小銀銭一枚にて換る金の
價ハ銀より十六倍なり金銭重さ七匁二分の物ハ大銀
銭十六枚にて換る廣東にて大銀銭一枚を銅銭ハ銅

銀壱貫二百文と成る（日本の判金壱両ハ大銀銭八九枚にかゆるよし伝聞す）

舟船

蛮舩の惣名をバリコともブケともいふ帆柱一本の小舩をバラ
ンタといふ帆柱二本の小舩をヘリカンラゴレタといふ同く大
舩をヘリガンテといふ三本柱乃大舶をフラガタといふ蛮
の作り惣躰丈夫にして底ハ銅にて包こと堅り油蜜
用ひて白黒塗まけ帆柱ハ継柱にして伸縮の出来る
様にし帆ハ白き麻布にて拵へ小くして数多くし
帆綱ハ風の強弱に応じて増減し帆柱を中々十字
形りもろくるなしあり舳先りそし右もしる帆横り

むらさき羅なる帆をあげて速くと風を使ひたれバ
子の方より風吹ても亥の西へ向ては走らず帆を施り
風乃帆遅まかりまちバ蛮夷とても舟のこと得ざる事なし
洋中にありて数十日山を見ざれども速くの精妙の器
械ありて天の度数と量り海路の里程を知りて晴日
雨風候とうらなひ定めんと欲する所ハ朝日を測して
必列り湊口を誤ることなし船中の号令厳明にて
水主少しも船頭乃指揮を背かバ船ハ忽たちまちるとも
柁の幅ハ狭く廣からバ是ハ動かんとする車の仕かけ有
てたのことを用ひバしし自由に動き針盤を顧

として船の歌測を試る器械とまたロクロ仕かけを加へ
度を測りを點ずる所にありと一して精巧なりざるべし
支那四百里五百里の海と安く越す小川を渡るが如く思
り大洋にて風波荒く烈しく起ても少しも恐るることなけ
連てハ唯懸に觸るとも恐るる事もなく地方近く察する
羅針盤を携へし大洋中にて暗礁ある所ハ浅瀬と探りて
能是を識り暗礁の側へとなれども百年も調練るる
中で凋も一縁し度支の船なるべし是に比すれバ
微しかに兒の戯の如しと為
大船というものあり長さ四十間余の船り全体を鉄にて

まく作り船の南端に鉄の大なる車を船中に機関
ありて大に火を焚て湯沸騰せしめ其力をもつて
輪て外の車を動しむるときは揺ずして船を走らしむ順風
ある時は帆をあげ逆風なる時は帆を下して走る故に常
矢の如し船戦の時兵粮を運送し又緊急の飛報
なる時は必此船を用ゆといへり是はアメリカにて作れる
ものなりしが廣東の便つよくイキリスの大船数艘有
とみえたりとぞ

草木

樹木すこぶるおほくあれども異草奇木多し是地広き故なり

直にのびたる木は甚稀なり之の反る木も直
ならず四方に延てまがりたるものゝ多く力ありて
用ひて唐藤の如くなる物を多く出し蘇木は何方に来り
あつまれる其深山なる樹なるを薪とする事まゝ
坤輿図識にいふブラジイルといへるは蘇木の事にて南アメリカの地に多く産
する所なれば即ちなみてブラジイルと名づくと見えたり我宋が一千五百
二年ポルトガル王アルハレスカブラアイルといふ者此地を劫奪し其名を改て
此名をも地の蘇木多く生ずる所なる故蘇木と名づけてブラジイルボウ
といふとあんぐたりと従前に分からざれども
南アメリカの地に蘇木多く生ずる事は疑なきなり
菓類は珍しき物数種ありビタヤといふはこれ樹全体
覇王樹に似て高さ一丈計刺多くして大なり
花を開きて後に實を生じ熟すれば自から

裂け中ハ赤くして西瓜の肉のごとく黒胡麻を振
かけたるやうなる点多くあり味甚甘しこれを取には
竿の先に釘をさし高き所にある梢を突きて実を釘
にて突さして取なり剌多き瓜ゆゑ取られざれ
梢なれバ直ハ釘に突さしたる実まで其の剌にかゝり
て落る瓜なり
ソモンといふハ酸橘に似てやゝ大きく味甚酸し
是を取て肉の肉を去り皮ばかりを塩にて砂糖
に漬置食後などに食ふ
グワヤホといふハ皮の質梨子のやうに似て大きく

九さし二種あり皮も柔にて生にて食ふに熟せざれ
肉ハ心脆くして食ふにつめたく味微し甘けれども
臭気ある瓜なり焼ざるものハ食ふる事能はず去
ども是を焼て細かなる時ハ油落して甚佳也
涼帝山に一種の木あり其名を忘れたり樹ハ
甚だ梧桐に似て毛なし直立して一丈余りのも
本人島にて山に入りけれ木を根より切倒して一丈
程づゝに切山中に深く穴を掘り枯木を集め薪
とし穴の中にて火を焚き其上に横たへ置き燻し
薪を燃らば出しまた穴の中に切たる木をのれ

之より青木の枝葉ハ切かけちを覆ひ置二三日を
経て又泥揚て持帰り食まを樹葉にて能焼継ひし
て脆く口中よりのりかり粘りと解て味甘き事蜜の
如し葉の面ハ少し渋滓あまた幹を全く解て
口中まかしも澀滓残らん

アルコドンの木多し 榔木綿く高さ一丈ばかりにもなる
其実日本の菓木綿よりハ大きく四ツにさけて綿
を出らハかまるヲなし糸引ハ細くして光沢
木綿布を織ハ絹く此綿く

禽獣

アリデイヤ
大さ鼠のごとし

遏八郎ミの種類乃人物男女並ニ小兒の圖

この種乃人ハアメリカにても今ハ甚だ希なり

鳥類鸕鷀家鴨山雉鷄鶩なと日本にかはる事
なし鳶ハ細なる鳥ハ首とも日本の鳶におなじく
を總くなりし鳥を綿りなんるもありさいわい鶏は
多く住狂なる事ぞも悪くハ細る羊行きなんとカラ
クン鳥ハ多く飼ひ置たる不ある黒ワホロといふ鶏を
黄鵝あるよしん
獣ハ犬猫鼠豕羊鹿牛馬なとかはる事なし
常の馬とカワヨといふ別に一種の馬ありて耳ながし
長さものとマチヨといふ騾馬又ブロといふを駈去
是て驢馬といふものなし耳まけて長し駱駝も

ありカメイヨといふ先年日本にて縦観ありしたる
とかしまかふ羊を多くありし其の羊をチボと
いふ則にむくげの縮のごとく和らかなるをボレゴといふ
むく毛其色なるをかし毛のあしきをカブロンといふ
西人の説にモンテガトといふものあり（モンテとは山カトは猫の事即ち山猫なり）
山中に住て形は大きさも猫に同じ夜中人家より
来りて人の鼻を嚙む時は其人忽ち死すといふ此ものゝ出
来る時は異香芬々として其香に満つ人是を
おそれ
鼠の大きなる獣あり皮の毛揃れより外の價らず

赤虎に似たり怒る時は太き尾を立て其勇猛
是をアリデイヤといふ
蟲は蛇蜥蜴蚤虱蚊蠅もありいづれも日本に替り
すくなし
魚類は西人賞玩せざるゆへ種類ひと多くは知ら
れず魚の類をべレカウといふ鰕をカマロンといひ海
鰡をバイナといふ鯽鯛鰈其外沖鰹鱸の類を
みなたる事ある是を知れば日本の魚にさして
かはる事なし

（印）

海外異聞巻之五 大尾

海外異聞 写し 五冊

紀州日高

大和舍

海 五ノ九

價壹歩弐